

公共の交通機関や飲食店で子供が泣きだし、親が周りの目を気にする場面を見かけたことはないだろうか。そんな肩身の狭い思いをする親にシールやステッカーを使い、温かく見守る気持ちを伝える取り組みが広がっている。親の心理的負担を減らそうと活動する二つのプロジェクトを取材した。

【本多由梨枝】



き町)が運営する佐賀支部も発足。広島の本部と両支部のシールの累計発行枚数は約7万5000枚で各本支部のホームページから注文できる。

一方、まほうのシールに先行し、16年に始まったのがW Eラブ赤ちゃんプロジェクト

国18府県の自治体と200以上の企業が賛同し、ステッカーの累計発行枚数は100万枚を超えるという。

インターネット広告などを手がけるインタースペース(東京都)と博報堂(同)が実施した「ママと子どもの公

泣く子を温かく見守る活動

公の場で泣く子やあやす親に手渡す「まほうのシール」は2019年に広島で生まれた。携帯しやすい手のひらサイズで、子供が見て笑顔になる動物やケーキなどのイラストがデザインされている。

「電車内で泣き叫ぶ赤ちゃんに他人は何がしてあげられるでしょう」。子育て環境の向上を目指す広島市の「広島こそだて未来会議」が、SNS(ネット交流サービス)への投稿を目にしたのがきっかけだった。この投稿に対し「シールを使えば『迷惑なんて思っていないよ』と態度で示せる」との声が多数寄せられたのをヒントに、同会議は「まほうのシール」プロジェクトを発足。個人や企業の支援金を基に無料配布を始めた。

シールは九州に広がり、20年1月、福岡市在住でシステムエンジニアとして働きなが

ら3人の子を育てる若杉和枝さん(40)が福岡支部を立ち上げた。若杉さんは「どんなに優しい目に向けても言葉にしないと伝わらない。(困っている親は)声をかけてもらうと安心する」と同会議に賛同。SNSで情報発信しながら福岡独自のシールも作り認知度向上に取り組んできた。活動のかがいがあり、現在、個人に加え企業15社が福岡支部の活動に協賛している。

養鶏や食肉加工の「トリゼンフーズ」(福岡市)も協賛企業だ。育児休業中の社員が活動を知り河津英弘社長(39)に支援を打診。子育て世代である河津社長も「子供は喜び、親は安心する」と共感し協賛を決めた。社員が取引先でシールを紹介するなど会社全体で普及に取り組む。

22年6月、子育て支援事業などを担うNPO法人「きゃんどのハート」(佐賀県みや

困った親に「まほうのシール」でメッセージ



ト)だ。福岡県筑後市出身で東京都在住のエッセイスト、紫原明子さん(40)が、赤ちゃんのイラストに「泣いてもいいよ」とメッセージを添えたステッカーを提案した。自分の子が幼い時に外出先で泣き声が「うるさい」と言われ、「申し訳ない気持ちと同時に、怒りや悲しみなど複雑な思いが深く残った」という。

賛同する企業や自治体がステッカーの印刷代を負担してそれぞれ配布。賛同者が目立つ場所に貼る仕組みだ。全

公共交通機関利用調査(18年)によると、子育て中の女性454人の8割が、子連れでの公共交通機関利用時に「困ったことがある」と回答。そのうち最も困った経験が「泣く、ぐずる」(65%)で、困った時に助けてくれる人が「いっもいた」と答えたのはわずか3・6%だった。厳しい現実



①まほうのシールを持つ福岡支部代表の若杉さん
②「泣いてもいいよ!」ステッカー①②ウーマンエキサイト